
雨が降ってた・・・・・・・・

坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨が降ってた・・・・・・・・

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

彼と一緒にホテルに入った、だが外は雨で。中森明菜さんの曲からヒントを得た作品今回は少しエロスが強いです。

第一章

雨が降ってた……

今私達は窓のない場所にいる、具体的に言うところとしたホテルだ。そこに彼と一緒にいる。

二人で入って楽しむことにしたし実際に楽しんだ、私はその後で彼にベッドの中で思い出した様に言った。

「そういえば今日夕方から雨だってね」

「天気予報で言ってたんだ」

「ええ、だからね」

それだと彼に話した。

「早いうちに出た方がいいかもね」

「入る時は晴れてたけれどね」

彼は私の言葉に眉を顰めさせて話した。

「それでもなんだ」

「天気予報ではそう出ていたわ」

「天気予報だね」

「外れるかもしれないけれど」

それでもとだ、彼に話した。

「若しかしたらね」

「そう思うと早く出た方がいいかな」

「フリータイムで入ったけれどね」

「それでもね」

「じゃあもう出ようか」

「ええ、楽しむことは楽しんだしね」

「それじゃあね」

彼は私に応えてくれた、そしてだった。

二人でベッドから出てシャワーを浴びてだった。

服を着て部屋を出た、そしてロビーでお金を払ってホテルから出る
とだった。

外は雨だった、私はその雨を見て彼に言った。夜の街に降る雨は
この上なく嫌なものに思えた。

第二章

「天気予報通りね」

「そうだね、帰る時の雨ってね」

「嫌よね」

「まして入る時に晴れていたら」

「尚更よね」

「全くだよ、けれど大丈夫だよ」

彼は隣にいる私に微笑んで話してくれた。

「僕傘持ってるから」

「持ってるの」

「折り畳み式だけれどね」

言いながら自分の鞆からその折り畳み式傘を出してきた。

「これがあるから」

「その中に入って」

「帰ろう、ただ小さいからね」

傘の面積はというのだ。

「寄り添ってね」

「帰るのね」

「そうしようか」

「そうね、ホテルから出た後だし」

楽しかった余韻が残っている、このことは事実だしだ。

「それじゃあ」

「身体寄せ合ってね」

「傘の中に入って」

「帰ろう」

「ええ、そうしましょう」

彼の言葉に笑顔で頷いた、そうしてだった。

彼が傘を開くと私はその中に入った、そして二人で話した通りにホテルの部屋の中でそうだった様に身体を寄せ合ってた。

そのうえでホテルを出た、そのうえで駅まで一緒に帰ってそこからはお別れの言葉を言ってそれぞれの家に向かう電車に乗った。

家の最寄りの駅に着いた時にはもう雨は止んでいた、通り雨だったらしい。私は雨が止んでいるその中を歩きながら彼に感謝した、雨が降っていても傘を持っていてその中に入れてくれた彼に。雨が降ったことは嫌だったけれどこのことは嬉しかった。

雨が降ってた・・・完

2022・12・28

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~28597

雨が降ってた・・・・・・・・

2023年06月28日 12時56分発行